

幕末に日本の未来のために

立ちあがった「会津藩」と「長州藩」

攘夷か開国か、ともに新しい日本の国づくりのために立ちあがったはずの両藩。しかしその結果は、天皇に忠義を守り通した会津と、新しい国づくりを目指した長州と、単に天皇制を維持したかっただけの天皇の思惑から、会津は幕府の身代わりになったようなものなのだ。

会津藩

会津藩中興の祖「松平容頌(まつだいらかたのぶ)」

会津藩祖の保科正之は、兄弟である三代将軍家光に引き立てられ大名に出世、徳川家に恩義を感じていました。寛文8年(1668)4月11日徳川家に忠義を尽くすことを藩の方針として、15カ条の家訓(かきん)を作り、この家訓は幕末まで会津藩の精神的な支えとなりました。

「会津家訓(かきん)15カ条」



会津藩家訓

15条の家訓から

- 1. 法を犯す者は許すべからず
 - 1. 主を重んじ、法をおそるべし
 - 1. 賄賂を行い、媚を求めてはならない
 - 1. えこひいきをしてはならない
- などは現代にも通じるものである。

家訓の中で注目を引くのは、3条と4条に登場する

- 1. 兄を敬い、弟を愛すべし
 - 1. 婦人女子の言、一切聞くべからず
- であろうか。

また、正之は朱子学を藩学として学問を奨励し、長幼の序を重んじ産業の振興にも力を注ぎました。

藩祖の正之を支えたのが家老田中玄宰(たなかまさはる)です。

会津藩政改革を進めた家老の田中玄宰(たなかはるなか)

五代会津藩主「松平容頌」は天明元年(1781)、6歳年下の田中玄宰(たなかはるなか)を家老に登用し、天明の大飢饉で大きな被害を受けた藩財政を立て直すべく藩政改革に取り組む。この時、会津藩は57万両もの借金がありました。藩政改革を成功させた熊本藩を手本にした田中玄宰は、改革の成功が文武の振興と殖産興業の奨励にあると考え、①武備の充実 ②学校の拡大 ③人材の登用 ④節約 ⑤刑罰の法を定める ⑥上下の身分をはっきりする ⑦賞罰をはっきりする ⑧村々の支配と風俗を正す の8項目からなる改革の骨子を提出。

具体的には①「藩校日新館」を設立、藩士の子弟は10歳になると日新館に入学し、会津藩士としての心構えや誇りを植え付けていったのです。②漆の栽培を奨励 ③養蚕 ④伊万里焼を学び白磁の基礎を造りました ⑤良質の酒造りに成功 …… こうした改革は会津藩が発展する基礎を造りました。

家老の田中玄宰(たなかはるなか)は、当時の幕府の老中土井利勝が、尾張の成瀬隼人、紀州の安藤帯刀と共に「天下の三家老」に挙げたほどの人物でした。

長州藩

中興の祖「七代藩主毛利重就(しげたか)」

毛利重就は長州藩の支藩である、長府藩主毛利国広の十男として生まれた。兄の死で長府藩主となり、また本家の長州藩の六代藩主毛利宗広が早くに死去したため、養子として跡を継ぐことになり長州藩七代藩主となる。この時、長州藩はコメの不作や藩商品の販売不振から財政赤字に陥っていた。

毛利重就は藩主就任と同時に、三家老に藩政改革書を出させる。最初に検地をおこない8年後に4万石の増収を得ることに成功した。この収入を藩財政には組み入れず、今で言う特別会計として「撫育方」を設ける。この資金を元手に港を造り整備して、廻船の寄港地として発展させ藩物品の販売などを行い利益を上げる。これらはすべて撫育方が当たった。

その後には塩田開発も進め21万石の利益を上げたと言う。このほかに製紙、製蠟などにも力を入れた。これらの生活必需品の「塩」「紙」「蠟」は「三白」として知られる。

多くの人材を輩出した「松下村塾」

江戸時代末期に長州萩城下に合った私塾。天保13年(1842)松陰の伯父である玉木文之進が8畳一間の私塾を開いたのが始まり。藩校の明倫館は武士しか入学できなかったが、松下村塾は武士や町民のへだてなく受け入れた。しかし、その教えはとても厳格なものであったという。

安政4年(1857)明倫館の塾頭であった吉田松陰が引き継ぎ、塾生は50名ほどいた。門下生には討幕の志士の総元締め役を果した久坂玄端(くさかげんずい)、吉田稔磨(としまろ)、入江久一、寺島忠三郎らが出た。またこれらの人々の死後には高杉晋作がおり、久坂・吉田・入江・高杉を合わせて松下村塾の四天王と言われた。彼らは明治維新にはみな死んでいるが、下っ端であった伊藤博文は初代の内閣総理大臣になっている。他には第9代内閣総理大臣の山形有朋、維新の三傑と言われた木戸孝義、東京工業大学初代校長の正木退蔵、江戸に送られる直前の吉田松陰の肖像を描いた松浦松洞など……。

多くの人材を輩出した松下村塾だが、吉田松陰が指導したのはわずか2年程であった。こんなにも短期間であったにもかかわらず、多くの人材を輩出した松下村塾の存在が際立つゆえんと言える。

幕末から維新への過程

世の中はどのように動いたのか

①黒船来航 → ②開国派 VS 攘夷派(異国の文化はすごい) → ③井伊直助が帝の許可なしに外国と条約を結び(1854 日米和親条約・1858 通商条約)、意見の合わない人を罰する(1858 安政の大獄)。反感を持つ人たちに 1860 桜田門外で暗殺される →

*1863.8.18... 8月18日の政変、京都堺町ご門の警備にあたっていた長州藩士久坂玄随ら 7 人が、公家と内通して討幕をもくろんでいるとして長州藩士を追放。

天皇は喜び会津に礼状を送る → 会津は忠義を守りとおした事を喜ぶ → これが禁門の変に

*1863 下関戦争.....長州は無通告で米仏蘭の艦船を攻撃、天皇が喜んだと宣伝するが、これは偽造されたものという。翌年英は米仏蘭と報復の攻撃で長州を撃滅。

*1864 禁門の変.....8月18日の変で追放された長州藩が、(追放されたのはおかしい、われわれは天皇のために動いてきたと訴えるもの)会津藩主の京都守護職松平容保らの、排除を目指した京都市街戦。

*1866 薩長同盟.....坂本竜馬・中岡新太郎の仲介で同盟、ともに討幕をめざす

*1864・1866.....江戸幕府による長州征伐軍 15 万が派遣される。これに対し長州は冤罪を解くために戦うとして、その考えを記したピラを配っている(自分たちは赤穂の志士と同じだ)・武器を購入(撫育方のお金)

-----このころは「忠義」と「正統性」が重んじられた時代、会津は国際情勢が分かっていると長州は思っていた。天皇にしてみれば天皇制を維持したいのが本音、そのため信頼できるパートナーを求めていると言える-----

④朝廷が「幕府をつぶそう」と考える。これに同盟を結んだ薩摩と長州が加担する。 →

⑤ところが、土佐藩の「やられる前に政権返上しちゃえばよい」という助言に徳川慶喜が 1867 大政奉還する。 → 新政府を創るのに徳川を入れるのかどうか、結果排除することを決める。

王政復古 → 江戸城開城 → これを受けて会津は戦うことを選択する。なぜなら、汚名を着せられたことは譲れないとの信念があった。 → 全面对決となり、一カ月の籠城の末敗れる。

⑥更に、その後も土佐藩は慶喜に政治参加をしてもらうことになる。これが気に入らない岩倉具視と薩長は「政権は朝廷にあるべきだ」と反対する(王政復古の大号令) → ⑦旧幕府と薩長の間で陰悪ムードに..... 戊辰戦争が起こる。薩長のやり方が気に食わない土佐藩だったが、仲間外れにされるのが寂しくて薩長に加担するようになる。 →

⑦官軍(薩長)の江戸総攻撃を前に旧幕府軍は降参し、1868 江戸城無血開城..... 幕府滅亡。

----- 共に新しい日本を創ろうとした両藩、しかし、感情は理性で抑えきれなかった。結果として、会津藩が幕府の身代わりになった。そして、長州は 1600 関ヶ原の恨みを返したことに -----

では両藩はいつまでも恨みを持っていたのか、後になって両藩の個人の手紙のやり取りが明らかになっている。それによれば長州藩士から会津藩士(秋月と奥平という人物)の手紙に「憎しみだけでなく、過去は咎めません。今度は朝廷のためにその力をお貸しください」と送っているのだ。それに、会津の東明寺には土佐の侍が眠っているし、萩の地蔵堂には会津の白虎隊の絵が祀られている。